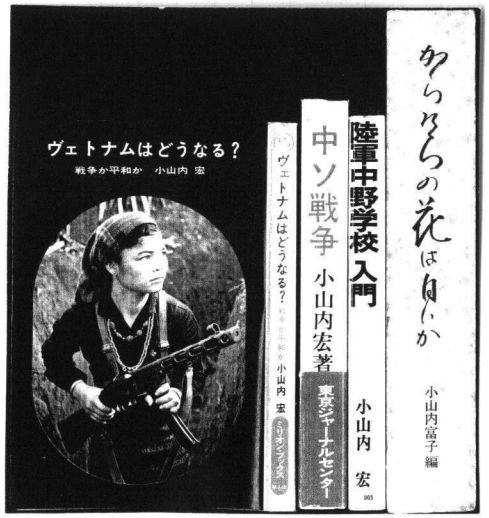
小山内宏（おさないひろし）　軍事評論家、小説家。大正五年八月十一日東京生れ、昭和五十三年一月四日没（一九二六―七八）。小山内薫の次男。成城学園を経てフィリピンのセント・トーマス大学で民族学を修めた。戦時陸軍に徴集せられ、フィリピンの陸軍情報部に勤務するも、病を獲て終戦前に内地送還。戦後は通訳の傍らハワイアン・バンドを率ゐて占領軍のキャンプ巡り、児童書や小説『大いなる翼』（昭和三十一年刊）、『ゴライアスの影』（昭和三十二年刊）等を書はしてゐたが、のちに『ヴェトナム戦争―このおそるべき真実』（昭和四十年四月三十日講談社『ミリオン・ブックス』）がベスト・セラーとなり、爾来軍事評論家として活躍。他に『ヴェトナムはどうなる？―戦争か平和か』（昭和四十二年一月二十五日講談社『ミリオン・ブックス』）、『中ソ戦争』（昭和四十八年七月三十日東京ジャーナルセンター）等多数。

小山内富子編『からたちの花は白いか―小山内宏追悼集』（昭和五十三年十二月二日私家版）があり、小山内富子著『ちょっとコーヒーのみに行ってきます』（昭和五十四年十二月八日付の特集）は妻による追想記。